思春期の性のトラブルと携帯電話

—ＩＴ化社会における思春期のコミュニケーション能力と性のトラブルとくに人工妊娠中絶件数に関する一考察—

Relationship Between Sexual Troubles and the Use of Mobile Phones in the Adolescent

— A thought on Communication Skills Among the Adolescent in the IT Society and the Sexual Troubles, Especially, Artificial Abortions —

和　田　由　香
Ｙｕｋａ　ＷＡＤＡ

【緒言】

現代ではインターネットの普及により情報化が進み，自分の部屋にいながら世界のニュースが瞬時に受け取れるというグローバル化，通信の高速化は我々の生活を大きく変化させている。

多くの人々が，家庭の電話だけでなく携帯電話，パソコン，インターネットなど多くの通信手段を活用している。更に思春期の若者の中には保護者や学校の教員という周りの大人よりも詳しくなり，ツールを使いこなしているものも多い。近年急速に進んだ情報化社会によって，思春期を取り巻く環境がどのように変わったか，思春期にどのような影響があったかを検討する必要がある。

筆者は上級思春期保健相談員として茨城県内で思春期の若者から健康相談を受けており，相談内容からみえてきた思春期の健康上のトラブルの原因に関して考察を加え報告する。

【情報手段の変遷】

手紙は相手に情報が届くまでに時間（日数）を要した。電話の出現により一方的あるいは一方向の情報発信からお互いにリアルタイムで情報交換が可能となった。当初電話は台数が少なく集落で１台など地域で活用することもあったが，次第に各家庭に１台電話があることが一般的となった。

ポケットベルは個人が持ち歩くことにより，移動中あるいは移動先での連絡が可能となった。携帯電話，自動車電話の出現により個人と個人がより多くの情報を双方向で交換することができ，いつでも密接なコミュニケーションをとることが可能となった。携帯電話にメール機能が付いたことにより，状況にとらわれずにより多くの場面でのコミュニケーションが可能となった。

【携帯電話は何故若者に人気があるのか】

携帯電話は高価であるにも関わらず若者の間で急速に広まっている。その最大の理由は「相手に直接つながるから」であると筆者は推測する。固定電話ではまず電話口に保護者がでて，名前を名乗って取り次いでもらわないと相手と話すことが出来ない。用件の前に言葉遣い，話し方のマナー，電話をかける時間帯などを親がチェックできることになる。

例えば苗字を名乗るだけでなく，どこの所属の人間で，どういう関係の者であるかを話して取り次いでもらわなければならない。「どんな用事であるか」という説明も必要で電話の目的についてもきちんと親が把握することができる。また，会話の内容が親に聞こえるので，相手との関係，親密であるかどうか，電話の目的など，その会話から伺い知る事も容易であった。

今では相手から直接本人へと携帯電話がつながる。即ち，保護者は相手の名前も住所も知ることが出来ない。同じ家に住んでいながら自分の子どもが電話をしていることすら気がつかない，という時代になった。

【思春期の身体的変化の特徴】

思春期とは心と身体が大人へと変化していく時期である。

男性であれば精巣から分泌される男性ホルモンの働きによって様々な変化が起こる。肩幅が広くなり，声変わりが始まる。筋肉がつきたくましい体つきになる。わきの下や性器の周りに毛が生えてくる。性器も発達し射精が起こる。

女性であれば卵巣から分泌される女性ホルモンの働きによって乳房が発達し，腰幅が広くなる。皮下脂肪が増えて丸みを帯びた体つきになる。性器が発達し排卵や月経が始まる。

【思春期の心理的発達の特徴】

思春期の心理の変化の特徴としては自分を一人前としてみてもらいたい欲求が強まる。とくに①大人から子ども扱いされるのを嫌う②大人を批判したり，反発したりする③自分を大人のようにみせたがる④異性に関する興味関心がわく⑤異性と一緒にいたいという欲求が強くなる⑥自分の内面に関心が向き，自分のことで悩むようになる⑦自分の将来について考え始める，等があげられる。

【身体の変化・心の変化と携帯電話】

思春期の時期になると心と身体が変化してくる。心の変化と身体の変化は身体的発達が先に起こり，あとから身体の変化に伴って心が変化が起こる。したがって，身体はすっかり大人ではあるものの，精神的に未熟，社会的に未熟という若者が増加している。

携帯電話は相手に直接つながる。保護者に知られず２人だけの秘密を持つことが可能となった。親からの干渉を避けたがる思春期の若者にとって親から離れる，親から離れ２人だけの秘密を持つことは魅力的なことである。

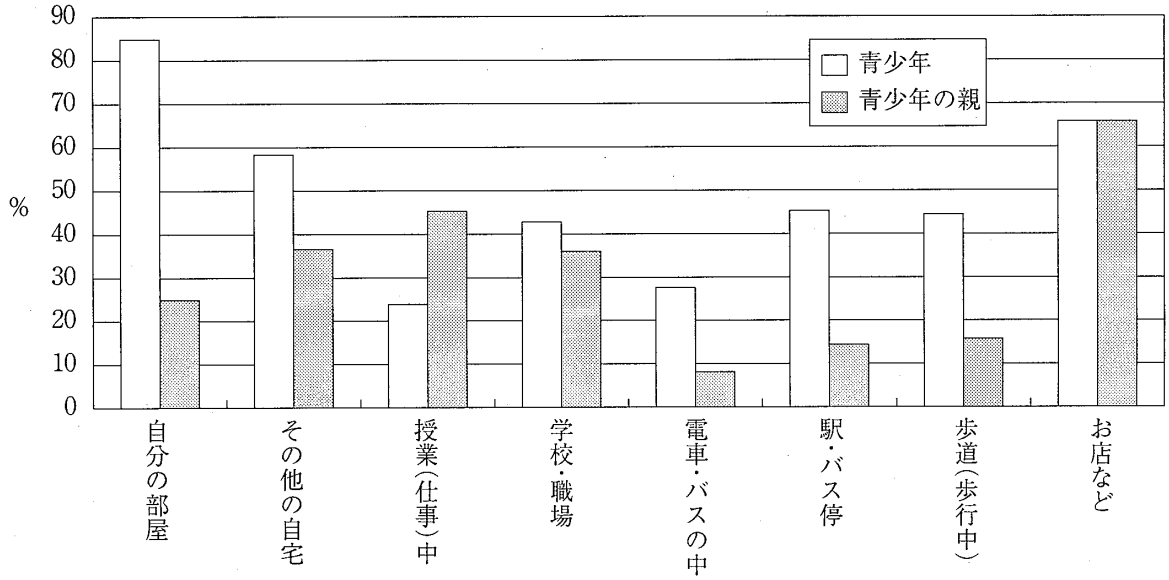
身体的にも射精や月経を向かえる小学校高学年から身体が大人へと変化していく高校生の時期では，異性への興味関心，接近欲，接触欲も年々高くなる。各種調査によっても異性への接触欲，接近欲が高くなることは明らかとなっており，今では自然なこと，誰にでも起こる普通のこととして小学校の教科や学級活動でも扱うようになった。

携帯電話での会話は表情がみえない。相手の心理を見抜く力が備わっていない思春期の時期には誤解やトラブルも多い。更にメールでは文字での情報交換となる。声のトーンやニュアンス等細かい情報が不足し，意思の疎通がより困難となり思い込みが多くなる。

相手が不誠実なために被害を受けたり犯罪に巻き込まれたりすることも多い。最初から性暴力を目的として相手を探す例もあり，出会い系サイトがきっかけで中学生，高校生がレイプされるという事例も報道されている。

【思春期はどこで携帯電話を使用しているか】

普段携帯電話で通話をする場所については図１のとおりである。最も多いのが自分の部屋であり８割を超えている。次にお店等，友達宅と続く。駅，バス停や学校，電車・バスの中とあり，授業中も20％以上であった。



資料：内閣府「情報化社会と青少年に関する調査の概要」平成14年７月

図１　普段ケータイで通話・メールをする場所

【携帯電話の使用による生活上のトラブル】

思春期の時期に携帯電話の魅力に取り付かれ夢中になることは全国的に広がっている現象である。このことに対し思春期の子を持つ親や教師の間では心配の声が上がっている。なぜそれほど携帯電話に固執するのであろうか。

思春期の心理的な発達段階として親への依存から心理的にも自立したいという欲求が強くなってくる。親の干渉を嫌い，自分のことは自分で決めたがる。親に秘密を持ち自分の世界を持つことは心理的には親離れの１つの段階であり，自己の確立，アイデンティティーの確立へ向けて必要なことでもある。自分と仲間との距離を短くし，親や教師に言えないような内容を話すのにとても都合のよいツールである。

心が順調に発達しているから喜ばしいことかというと，携帯電話には実際には問題点も数多く指摘されている。①お金がかかる。携帯電話自体が高額であり子どもの小遣いでは購入が難しい。また購入してからが大変であり，月々の利用料金は高額である。店でショッピングするようにその都度支払うものでなく，月ごとに使用した分が請求され，しかも支払いは翌月というシステムは思春期の時期には自分で予定どおりに自己管理するのは困難である。②利用時間が長い。固定

電話のときには相手の家族の生活を考え，早朝や夜遅くの電話は緊急時を除き控えるのが社会のマナーであり，家庭で親が子どもに教えるマナーの１つでもあった。しかし現代の若者の生活は夜型となっており，また自分の部屋で親が就寝してからも自由に会話ができるので利用時間が長くなる。メールでは相手の都合を心配せずに情報交換ができる一方，最近では「すぐに返事が来ないと嫌われているかと思う」という心情も働き，ついつい返信してしまうなど，生活時間の多くが携帯電話に費やされていくことが伺える。家族で食卓を囲んでいるときでさえ，携帯電話で友人と話したり，メールをしたりすることが増えてきている。③犯罪に巻き込まれる可能性がある。相手が見えないため，心理的な抵抗が少なくなり，知らない人と知り合いになったり，普通の生活では出会わない人と会話をする，といったことも起こりうる。ときには最初から犯罪を目的とした誘い（出会い系サイトなど）も多く，大人では騙されないような誘いにも思春期では相手を信用してしまい実際に会いに行ってしまうこともある。被害に遭わなくても個人情報が流出し，脅されたり嫌がらせを受けたりする例もある。

【思春期保健の現状】

思春期の時期を健康に過ごすことは生涯の健康づくりの上でも大きな意味を持つ。2001年から2010年までの「健やか親子21」国民運動が文部科学省と厚生労働省で展開されているが，なかなか一般の人々に浸透していない。茨城県では思春期の若者だけでなく，思春期の子を持つ親，学校教職員，思春期を支援する立場の各種団体の研修で思春期の健康に関する研修が始まっており，大きな反響を呼んでいる。健康教育の重要性，正しい情報を見極める力を養う，性に関する科学的な知識を持つことの必要性は，家庭，学校，地域で充分な議論を積み重ね，多くの立場の方が認識を新たにしているところである。

【統計からみる茨城県の思春期保健の現状】

茨城県の思春期の健康に関してデータでみてみると，まだまだ十分とは言えない。健やか親子21では取り組みの大きな柱を４つ策定し，その第一に「思春期保健対策の強化と健康教育の推進」という大きな課題を掲げている。とくに「十代の人工妊娠中絶の数を減らす」「十代の性感染症罹患率を下げる」という重要項目を示している。これは現在の状況を把握し，目標値を定め，効果のある方法で取り組むという運動が行われている。下記に都道府県別の15歳から19歳の人工妊娠中絶率の表を示す（表１）

【茨城県では何故十代の人工妊娠中絶が増えて続けているか】

茨城県では望まない妊娠をする女子中学生，女子高校生が増加している。全国で15歳～19歳の女子人口千対の人工妊娠中絶実施率は低下している中で，茨城県は2001年が9.1，2002年が10.5と

（表１）　15歳～19歳の女子人口千対の人工妊娠中絶実施率の推移と増加率

	2001年	2002年	増加率 (02年/01年)
全　国	13.0	12.9	99.2
北海道	21.9	21.0	95.9
青森県	16.4	13.6	82.9
岩手県	18.0	16.6	92.2
宮城県	17.5	17.3	98.9
秋田県	18.2	18.0	98.9
山形県	17.2	15.6	90.7
福島県	19.4	20.5	105.7
茨城県	9.1	10.5	115.4
栃木県	17.5	16.1	92.0
群馬県	13.3	12.0	90.2
埼玉県	8.7	10.7	123.0
千葉県	9.0	8.6	95.6
東京都	9.7	9.6	99.0
神奈川県	10.5	10.2	97.1
新潟県	13.3	13.4	100.8
富山県	10.5	10.0	95.2
石川県	13.7	13.7	100.0
福井県	9.1	9.5	104.4
山梨県	7.0	6.5	92.9
長野県	14.4	20.1	139.6
岐阜県	11.5	10.3	89.6
静岡県	12.9	12.5	96.9
愛知県	12.5	11.6	92.8

	2001年	2002年	増加率 (02年/01年)
三重県	13.4	16.0	119.4
滋賀県	12.7	12.2	96.1
京都府	11.8	12.3	104.2
大阪府	10.8	11.0	101.9
兵庫県	9.5	9.7	102.1
奈良県	5.5	6.8	123.6
和歌山県	12.8	12.5	97.7
鳥取県	21.5	21.3	99.1
島根県	10.1	11.1	109.9
岡山県	17.2	16.8	97.7
広島県	14.9	14.3	96.0
山口県	12.2	12.8	104.9
徳島県	9.8	10.8	110.2
香川県	16.9	15.6	92.3
愛媛県	14.7	15.1	102.7
高知県	21.3	19.2	90.1
福岡県	19.6	19.2	98.0
佐賀県	18.0	16.7	92.8
長崎県	16.0	14.9	93.1
熊本県	15.5	16.1	103.9
大分県	20.5	16.9	82.4
宮崎県	10.1	10.9	107.9
鹿児島県	11.6	12.9	111.2
沖縄県	8.9	7.4	83.1

増加率は前年比115.4である。

人工妊娠中絶という転帰をたどるにはどのようなケースが考えられるか。①妊娠を望んでいなかった，②思いがけず予定外，計画外の妊娠であった，③妊娠自体はそれほど困らないものの，子どもを育てるビジョンがなかった，④学業を中断したり夢を諦めることになるのを避けたかった，⑤経済的に子育てをすることが難しいと予想された，⑥その後のパートナーとの人間関係がいい状態を保つことが難しかった，などが想定される。

これは，自己決定能力，意志決定能力，行動選択能力などの前に，知識が不十分であったことが考えられる。即ち性交が行われたらその結果「妊娠する可能性がある」「性感染症に罹患する可能性がある」ことをよく認識していなかったのではないか。

次に妊娠を防ぐ方法を知らなかった，もしくは知識は持っていたが実際に自分の健康行動として実践するだけの技術を持ち合わせていなかったことが想定される。妊娠を防ぐ予防行動ができなかったことから，性感染症に対する予防行動もできていなかったと考えられる。中学校の保健体育の教科書にコンドームについての記載があり，中学３年生であれば学校の授業で取り扱うのでその意義について学習している。コンドームを適正に使用すれば妊娠及び性感染症の感染を予防できると習っているのだが，実際にあたふたした恋愛の場面で十代の若者が適正に確実に妊娠を防ぐだけの予防行動が実践できなかった，と考えられる。

【望まない妊娠に関する相談からみえてきたもの】

上級思春期保健相談員として茨城県内在住・在学の思春期の若者から健康に関する相談を受けている。望まない妊娠をしてしまった，或いは妊娠したかもしれないという妊娠不安の相談は平成12年で61件，平成13年で68件，平成14年で76件，平成15年で89件であった。

相談の中から聞き取りで得た情報（メールも含む）をまとめると若者の性行動の特徴がわかってきた。

〈１〉妊娠してしまった思春期の若者にコンドームの使用について聞いた。「コンドームを使用した」という例が18%，「使用しなかった」という例が72%，「不明」が９％であった。

〈２〉コンドームを使わなかった例のうち「避妊をしたかどうか」について聞いた。「した」と答えた者が56%，「しなかった」と答えた者が40%，「わからない」が４％であった。

〈３〉「避妊をした」と答えた者にその方法について聞いた。「膣外射精」が79%，「セックスのあとぴょんぴょん跳んだ」が８％，「セックスのあとすぐに排尿した」が２％，「男性に息を止めてもらった」が１％，「２回目の射精で薄まっていた」が１％であった。避妊とは言えないがこの問いに対し「シャワー・ビデ・飲料等で洗った」「腹パンチ」などと答えたものが６％であった。

〈４〉「コンドームを使った」という者のうち，いつ使ったかを聞いた。「最初から使用した」は

12%，「途中から使った」24%，「射精の直前に使った」64%であった。

〈5〉「コンドームを使った」という者のうち，そのコンドームは誰が持っていたかを聞いた。「相手」が52%，「自分」が24%，「そこに置いてあった」が18%，「2人で買った」が4%であった。「友達がくれた」と答えた者が2%であった。

〈6〉「コンドームを使った」という者のうち，そのコンドームの質について聞いた。「期限がきれていたかどうか」について「期限が切れていたかもしれない」45%，「期限内である」21%，「わからない」34%であった。「期限が切れていたかもしれない」と答えた者のうち，5年以上前の商品を使った者もあった。

〈7〉「コンドームを使った」という者のうち，コンドームに使用期限があることを知っているかどうか聞いた。「使用期限があることを知っていた」4%，「使用期限があることを知らなかった」92%であった。

〈8〉「コンドームを使った」という者のうち，そのコンドームの保存方法について聞いた。「財布に入れていた」54%，「定期入れにいれていた」21%，「カバンに入れていた」12%，「筆箱に入れていた」6%，「化粧ポーチ」3%，「ポケットに入れていた」1%であった。

〈9〉「コンドームを使った」という者のうち，射精後の行動について聞いた。「すぐに離れた」23%，「ずっと接触していた」72%であった。コンドームが脱落してしまい女性の膣の中に置き忘れてしまったという者もあった。

〈10〉妊娠不安について聞いた。「妊娠したかもしれないと思ったのはいつか」という問いに「すぐ」と答えた者は6%，「1ヶ月以内」という者は8%，「2ヶ月以内」という者は36%，「3ヶ月以内」38%，「4ヶ月以内」12%であった。いずれもまさか自分は妊娠していないと思いつつ時間が経ってしまったという内容であった。既に妊娠判定薬で自分でチェックしている者もあるが，「陽性であったがこれは信頼できるか」という相談もあった。

〈11〉妊娠しているかもしれないことについてパートナーと話し合ったかどうか聞いた。「パートナーと話し合っている」58%，「話し合っていない」38%であった。出会い系サイトで知り合ったためメールアドレス（メルアド）が変更されてしまい連絡がとれない，連絡方法がわからないというケースも少なからずあった。

〈12〉妊娠不安について誰かに相談したか聞いた。「相談した」78%，「相談していない」20%であった。「相談した」と答えた者のうち「友人」68%，「先輩」28%，「養護教諭」3%，「兄弟姉妹」2%，「学校の先生」1%，「親」1%であった。しかし自分が妊娠しているかもしれないとはっきり伝えていない場合が多く，情報を聞き出すために話題にしたという者が多かった。

〈13〉コンドームを使用しなかった者に「なぜ使用しなかったか」と聞いた。「妊娠しないと思ったから」「言い出せなかった」「妊娠しにくい体質だから」「今までも大丈夫だったから」「安

全日だから」「膣外射精で充分効果があると思っているから」などがあった。中には「相手に強要されて」という者もあった。

〈14〉相談の内容として「どうすればいいかわからない」「産婦人科に行くのはいやだ」「親や学校に知られたくない」「お金がない」「相手に知られたら怒られる」「学校を退学させられるのはいやだが内緒で産む方法はないか」などが多かった。手術を受けるという明確な意志を持っている者でも手術を受ける期間が法律で決まっていることを知らなかったり，期間が過ぎていると思われるケースも目立った。

【考察】

携帯電話を“ケータイ”と呼ぶ思春期の若者文化ではＩＴ化社会で現実と非現実の境が曖昧となっている。バーチャル体験と実生活がいわゆるボーダーレスであり，性のトラブルが年々低年齢化，活発化の一途を辿っていることもこの影響を受けていると筆者は考える。

たまごっちに代表されるテレビゲーム等のリセット文化は気軽さ，手軽さが特徴であった。パソコンやケータイが見えない相手をつなぐ恋愛シミュレーションは思春期の生活と性の商品化をより身近なものにした。メールやチャットで匿名どころか“匿顔”の異性との出会いを求め，伝言ダイヤル，テレクラ，ツーショットダイヤル，出会い系サイト等で文字の言葉に酔ってしまい，相手を素晴らしい人だと思い込んでしまう。今では援助交際による売買春で性犯罪へのハードルも低くなってきていると予想され，被害者にも加害者にもなり得ると考えられる。

思春期の時期を健康に過ごすことは生涯の健康づくりに役立つ。しかし健康管理をするには最低限の科学的な知識が必要である。学校の保健体育の教科書に記載してある内容を充分に理解していなかったり，雑誌やメディアなどから発信される情報を，正しいかどうか見極める力を持たずに信用してしまうことも多く，健康被害を被る結果となることがある。

また携帯電話のチェーンメールで間違った情報が流され，仲間同志や地域で多数を占める若者が信じてしまっている例も見受けられた。

妊娠だけでなく，性感染症も重要な問題である。思春期の若者の多くが性感染症に関しての知識が不十分で，感染経路，感染予防の具体的な方法の知識が不足していた。特にエイズに関する情報は誤った認識が多いのが印象に残った。

これからは単に医学的な立場からの病気の話だけでなく，トータルヘルスポロモーションの視点から自分の健康を守る，自分が感染を予防するという健康行動を実践していくような健康教育が必要である。

主体的な行動変容をきたす健康支援を目指し，医療，看護，福祉，学校教育，社会教育，青少年健全育成など多方面の密接な連携が望まれる。共通認識のもとに共通実践をきたすことを目標とし，大人の側の意識改革と研修が必要である。思春期の性のトラブルを減らすことを目的とし，

思春期の若者が夢や希望をかなえらえるよう取り組んでいきたい。

参考文献

WHO, Life Skills Education in Schools, 1993

WHO, Guidelines, Life Skills Education Curricula for Schools, 1999

「自己効力」

Bandula A　金子書房，1997

「ライフスキルと性エイズ教育」

武田　敏，学校保健研究，2004

「脳機能に基づく思春期性教育の展開法」

武田　敏，思春期医学，2004

「男女の生活と意識に関する調査」

平成14年度厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）研究「望まない妊娠，人工妊娠中絶を防止するための効果的な避妊教育プログラムの開発に関する研究」班・㈳日本家族計画協会

「若者にもっと健康教育を！」

和田由香，21世紀の茨城をこうしたい・大好きいばらき未来創造論文，2001